

## プロローグ 「キレイ」なSDGs

SDGsは現代社会最大のキレイゴト？

キレイゴトとは、考えてみると不思議な言葉です。「キレイ」なのは基本的に良いことのはずなのに、「ゴト」がつくと肯定的な意味では使われません。辞書を引いてみると、〈現実を無視して、表面だけを取り繕うこと〉〈体裁ばかりで現実味のない事柄〉などと書いてあります。リアリティに欠ける理想論、といったところでしょうか。

もちろん、理想論はほとんどの人が望んでいることを言っているので、頭ごなしに全面否定するわけにもいきません。しかし、素直に「そうだそうだ！」と賛同するのは躊躇ちゆうちゆうしてしまふ。「それはまあ、そうなんだけど……」と、聞く人の口をモゴモゴさせるのが、キレイゴトというものです。たとえば、こんな台詞せりふが典型かもしれません。

「みんなが武器を捨てて仲良くすれば、明日にでも戦争のない平和な世界になる！」

たしかに、間違っただけではありません。小学生にこう言われたら、とりあえず「うんうん、そうだよ」と言うしかありません。

でも、現実の世界はそう簡単にはいきません。キレイゴトの向こう側には、子どもには説明しにくい「大人の事情」というものがあります。隣国を侵略している国の大統領に向かって「戦争は悪いことだから武器を捨てませんか？」と提案したところで、どうにもならないでしょう。誰もが平和を願いつつ、しかし武器を捨てることもなかなかできない。だから、みんながアレコレと知恵をしまりながら四苦八苦しているわけです。

キレイゴトには存在意義がない、と言いたいわけではありません。むしろ、誰もキレイゴトを口にしなくなってしまうたら、希望の見えない殺伐とした世の中になるような気がします。キレイゴトを言うだけでは何も変わらないけれど、大人の事情（＝リアリズム）だけでなく世の中は動かない。それも確かでしょう。

いまは多くの企業が「ビジョン」と呼ばれる独自の理念や目標を掲げています。それも、大半はキレイゴトかもしれない。たとえば電気自動車で有名な米国テスラ社のビジョン

は、「化石燃料に依存する文明のあり方に終止符を打つ」というもの。なんとも大きな風呂敷を広げたものですが、こういう無茶ぶりのような理想論があるからこそ、それを少しでも具体化するための知恵も出てくるのだらうと思います。

そんなわけですから、キレイゴトとのつき合い方は、どうにも一筋縄ではいきません。否定も肯定もできずに、モヤモヤしてしまいます。そして、いまの社会で多くの人々をモヤモヤさせている最大のキレイゴトのひとつが、本書のテーマである「SDGs」ではないでしょうか。

### キレイなだけのものはオモロない

二〇一五年に国連総会で採択されたSDGs (Sustainable Development Goals = 持続可能な開発目標) では、国際社会が二〇三〇年までに達成すべき一七の目標が掲げられました。それをまとめて表現したのが、それぞれの目標を表す一七色をぐるりと並べた鮮やかなシンボルマークです。キラキラと輝くまさに「キレイ」なピンバッジを襟元などにつけて歩く人も目立つようになりました。

## SDGsの17の目標

- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 貧困をなくそう                | 10 人や国の不平等をなくそう           |
| 2 飢餓をゼロに                 | 11 住み続けられるまちづくりを          |
| 3 すべての人に健康と福祉を           | 12 つくる責任つかう責任             |
| 4 質の高い教育をみんなに            | 13 気候変動に具体的な対策を           |
| 5 ジェンダー平等を実現しよう          | 14 海の豊かさを守ろう              |
| 6 安全な水とトイレを世界中に          | 15 陸の豊かさを守ろう              |
| 7 エネルギーをみんなに<br>そしてクリーンに | 16 平和と公正を<br>すべての人に       |
| 8 働きがいも経済成長も             | 17 パートナリーシップで<br>目標を達成しよう |
| 9 産業と技術革新の<br>基盤をつくろう    |                           |

しかしそういう人も、会社の決まり事としてバッジをつけてはいるものの、内心では何かすっきりしないものを抱えているかもしれません。「私はいまキレイゴトを言っています！」と宣言しているような気恥ずかしさを感じている人も多いだろうと思います。

私自身、もし誰かにあのバッジをつけてくれと頼まれたら、きつと困惑するでしょう。苦笑いを浮かべながら、「申し訳ないけどご勘弁ください」と、丁寧にお断りするかもしれません。

たしかに、SDGsが掲げる一七の目標は、いずれもごくまっとうなものです。真

正面から強く反対する理由はとくにありません（なにしろキレイゴトとはそういうものです）。でも、大学で教育や研究に携わる身としては、「SDGsはすばらしい！」と諸手を挙げてそのムーブメントに加わろうという気持ちにはなりにくいのです。

これは、学生時代から四〇年以上も京都大学で過ごしてきたがゆえの性分のようなものかもしれません。こんな言い方をすると、真面目に取り組んでいる方々には叱られそうですが、ひとことで言えば、SDGsは私にとって「オモロない」のです。

先ほど、「キレイ」は基本的に良いことだと言いました。でも、この言葉は必ずしも良い意味だけでは使われません。たとえば美術の世界では、師匠が弟子の絵に対して「キレイに描けてはいるけど、何か足りない」といった言い方をすることがあると思います。技術的にはそれなりに高いレベルでも、人の心を動かすインパクトに欠ける。そんなニュアンスでしょうか。実際、私のような素人が見ても、「キレイなだけで、とくに面白くない絵」はあります。

つまり「キレイ」という言葉には、「整っている」という意味合いが含まれている。辞書の「キレイゴト」の説明にも「体裁ばかり」という言葉がありました。そして、物事は

体裁の整った秩序正しい状態がいつも良いとはかぎらない。どこか破綻や乱れのようなものがあつたほうが、価値を持つことがあります。

それは芸術だけではありません。学問もそうです。私は京大に入学した当初、何人もの先生方に「アホなことせえ」と言われました。最初は「真面目に勉強しようと思って入学したのに、何を言い出すんだ」と面食らいましたが、この「アホ」には「従来の常識にとらわれるな」という意味が込められています。

先人たちが積み上げてきた「常識」を身につける高校までの勉強と違って、大学でやる学問や研究は、いままで誰も知らなかった新しいものを探究する営みです。そのためには、秩序正しく敷かれたレールの上を走るだけではいけません。どこかで「アホやなあ」と言われるような逸脱がないと、人とは違う場所にたどり着けないのです。

京大が掲げてきた「自由の学風」とは、そういう逸脱を奨励するものだと言えるでしょう。誰も考えなかった「アホ」なことを始めても、京大では「そんな研究が何の役に立つんだ」などとは言われませんでした。むしろ「そりゃあオモロいなあ」と褒められる。逆に、たとえ役に立つことであっても、誰でも思いつくようなキレイに整った研究は「オモ

口ない」とそっぽを向かれてしまうのです。

あらかじめ「ゴール」を設定されたSDGsは、まさに敷かれたレールの上を走るようなものだと言えるでしょう。もちろん、そういう明確な目標に向けて真面目に研究に取り組む人たちも世の中には必要です。でも、長く京大で過ごしてきた私自身にとっては、オモロくない。秩序が整いすぎていて自由がない、とも感じます。だから、積極的にそのレールに乗りたいとは思わないのです。

法律はすべて守ればいいわけではない!?

ただしその京大も、近年は「自由の学風」が色褪せてきました。その背景には、日本社会が大学に求めるものが変わってきたという事情があります。

というのも、いまの日本は、経済に余裕がありません。だから政府としては、効率的にイノベーションを起こしたい。そのために、すぐ役立ちそうな研究に資金を優先的に投入する。いわゆる「選択と集中」です。

その傾向がどんどん強まってきたことで、何の役に立つかわからない研究はやりにくく

なっていました。そのため京大でも、「オモロイアホ」が影を潜めて、敷かれたレールの上で真面目にやっついていく研究者が増えてきたのです。

しかしイノベーションは、「選択と集中」のような計画的なやり方だけで起こせるものではありません。それはこの世界が予測不能な「カオス」だからなのですが、それについてはのちほど詳しくお話ししましょう。ともかく、何の役に立つかわからなかった研究から生まれた発見が、予想もしないところで別の何かと結びつくことはめずらしくありません。そこから画期的なテクノロジーが誕生することもあります。

ですから、せめて「自由の学風」の伝統を持つ京大では、常識にとらわれない研究文化を廃すたれさせたくない——そんな思いから、私は二〇一七年に「京大変人講座」と名づけたイベントを立ち上げました。京大らしい非常識でオモロイ研究をしている先生方を招いて、学生や企業関係者などに話をしてもらう公開講座です。

その変人講座を始めるきっかけになった、ある研究者の言葉を紹介しましょう。SDGsのことを考えるとき、私はいつもこれを思い出します。

「法律は、真面目にすべて守ればいいというものではないんですよ」

こんな話をしてくれたのは、当時、京大大学院の人間・環境学研究科准教授だった那須なす耕介こうすけさんです。「だった」と過去形にせざるを得ないのは、本当に残念でなりません。那須さんは教授となり、二〇二一年九月に、若くして病氣のために亡くなってしまいました。

那須さんの専門は、法哲学です。その分野の専門家が「法律は守らなくてもいい」と言うのですから、私はビックリしてしまいました。いかにも常識破りのオモロい話です。ふだん文系の研究者とはあまり接点がないのですが、文系の中でもいちばん堅苦しそうな法哲学の専門家がこんなことを言うのは、じつに意外で興味深い。そういう話こそ、「自由の学風」を謳うたう京大が世の中に大きな声で語るべきではないかと思ひ、変人講座をやるうと思うようになったのです。

では、その「非常識」な言葉はどういう意味なのか。那須さんいお曰く、法律を真面目に守りすぎると、時におかしなことになる。その例として彼が挙げたのは、PL法（製造物責任法）でした。製造物の欠陥から消費者を守るためにつくられた法律です。

その法律ができたことで、メーカーが製品につける取扱説明書はやたらと分厚いものになりました。事故が発生したときに生じる賠償責任を回避するために、たとえば「猫を電

子レンジに入れないでください」などといったことまで書くようになったからです。

その結果、どうなったか。あまりに分厚くて面倒くさいので、誰も取扱説明書を読まなくなりました。そのため、かえって事故のリスクが高まった。消費者を守るために制定されたはずの法律が、消費者を危険にさらす結果になってしまったわけです。

### 一七の目標に生じるトレードオフ

このように、良かれと思ってつくった法律が、かえって悪い結果を生むことがある。そうなるってしまう最大の理由は、「誰も全体を把握していない」ことでしょう。

これも「カオス」と関係のある話なのですが、自然界も人間の社会もきわめて複雑なシステムになっているので、何と何がどこで結びついて、どのような相互作用を生み出すかは予測できません。ある事象が思いがけない流れで別の事象に影響を与えることで、「風が吹けば桶屋が儲かる」のような想定外の現象が、いくらでも生じ得ます。だから、ある一部分に着目して「これでうまくいくはずだ」と思われた法律が、想定とはまったく逆の結果をもたらしてしまうこともあるわけです。

SDGsにも、同じことが言えるのではないでしょうか。ひとつひとつの法律が正しく見えるのと同様、SDGsの一七の目標も、ひとつひとつ見れば何も問題はありません。しかしその中には、お互いに矛盾を生じかねないものもあります。ある目標を達成しようとする、別の目標の達成を邪魔してしまう（つまりトレードオフが生じてしまう）おそれがあるのです。

たとえば、SDGsの二番目に「飢餓をゼロに」という目標があります。これを達成するには、農業の効率化による生産増大が必要でしょう。そのためには、農業をいまよりも多く使うことも必要かもしれません。ところが、これは三番目の目標である「すべての人に健康と福祉を」という目標と矛盾しそうです（この目標の具体的な達成基準の中には「有害化学物質や大気・水質・土壌の汚染による死亡や疾病の数を大幅に減らす」という項目もあります）。一七の目標のあいだにこうしたトレードオフが生じる可能性があることは、国連でSDGsを設定した人々も認識しているでしょう。それでもあえて「キレイゴト」を掲げることと、社会を変えるきっかけにしたいのだと思います。逆に、ある目標の達成を目指す、別の目標も達成に近づくという相乗効果もあり得るので、それはそれでいいでしょう。

しかし、どこでどういうトレードオフが生じるかは、誰にも完全には予測できません。想定外の矛盾が噴出して、SDGs全体のバランスがおかしくなってしまう可能性だって、まったくないわけではないのです。

こういうことが起こるのは、先に書いたように人間の社会が「誰も全体を把握していない」一種の生態系として成り立っているからです。自然界の生態系では、何らかの環境変化が起こると、その影響を受けた種が何らかの対応をして、その影響がまた別の種におよぶということが起こります。そういう影響の連鎖が何周か回って、最終的には全体としてだいたい辻褄つじつまの合う状態に落ち着くのですが、これには時間がかかるので、必ずうまくいくとはかぎりません。途中で生じた矛盾を修正する時間がないと、悪循環に陥って全体が破綻することにもなりかねないのです。

ちなみに、那須さんが京大変人講座の第二回に登壇したときのテーマは「安全・安心が人類を滅ぼす」というものでした（三笠書房刊『京大変人講座』に収録されています）。ビックリするような逆説ですが、たとえば「食の安全・安心」を守るために法律をつくると、みんなが「安心」してしまい、冷蔵庫の食べ物が本当に「安全」かどうかを自分の鼻や舌で

確かめなくなるので、人間としての生きる力が損なわれる。先ほどのPL法と似た話ですが、よりうまく生きるために安全・安心を追求した結果、かえって人類が滅亡に近づくということも考えられるわけです。これもやはり、誰も本当の正解は知らないのに、誰かが正しいことを知っていると信じて、自分で判断することを忘れている。それによって、社会全体が危険にさらされるということです。

### SDGsと「ぼちぼち」つき合っていく方法

人間社会には、そういうことが常に起こり得ます。SDGsに取り組むときには、そのことを忘れるべきではありません。誰にも全体は見えていないから、何が正解かはよくわからない。一七の目標をすべて完璧に達成することなど、まず不可能です。

だからといって何もしないわけにもいかないでしょう。私自身、そうは言いながらも、諸事情あって、大学でSDGsと関わらざるを得ない立場になりました。モヤモヤしながらも一七色のバッジをつけている人と似たような立場かもしれません。そこで私が思い出すのは、京大名誉教授だった数学者の言葉です。

「ぼちぼちでええんや。そのほうがうまくいく」

もうおわかりの方も多いかもしれませんが、言葉の主は、数々の名エッセイでも知られた森毅<sup>つよし</sup>さん。森さんこそが、京大的な「変人」の代表選手のような存在かもしれません。教員時代は、授業を教室でやらずに、京大構内に植えられている木の下に学生たちを集めていたこともあったそうです。どの木の下でやるのか知らされないので、学生たちは先生のある木を探してウロウロしていたとか。「ぼちぼち」というより「気まぐれでテキトー」という感じでしょうか。

そんな森さんが言いたかったのは、「未来は何が起こるかわからないから、計画を立てて完璧にやろうと思ってもそうはいかない」ということでしょう。むしろアバウトに「ぼちぼち」やっていくと、どこかでなんとなく辻褄が合って、いい塩梅<sup>あんばい</sup>に落ち着いていく。全体の辻褄が合うまでには時間がかかるので、「ぼちぼち」が重要なのです。のちほど紹介しますが、これは「カオス理論」と同じく複雑系の研究から生まれた「スケールフリーネットワーク」という考え方にも通底するものです。

SDGsも、そもそも全体が見えないのですから、何が「完璧」なのかもわかりません。

一七個の目標は明確ではあるものの、全体としての「ゴール」がどこにあるのかは誰にも見えていない。ですから、様子を見ながら「ぼちぼち」と取り組んでいくしかないのです。あえてひとことと言ってしまえば、SDGsとは「みんなで楽しく幸せになろう」という話だと私は思っています。それはそれで、方向性としてはすばらしい。では、この壮大なキレイゴトといかに「ぼちぼち」つき合っていけばよいのか。それを、本書を通じて考えていきたいと思います。